

# 金沢文庫本『観経疏聞書』について

廣 川 堯 敏

## 一

浄土宗の教学を大成したのが、法然から教えて三代目の良忠であるとする、良忠の活躍期の歴史的背景はどのようなものであつたであろうか。このような問題意識から展開させたものが法然門流初期教学五期区分説である。すなわち、筆者は法然の立教開宗から一遍が入寂するまでの約百年間を五つの時期に分けて考察している。まず第一期は法然教学成立期で、法然が立教開宗した承安五年（一一七五）から法然入滅の建暦二年（一二二二）にいたる三十七年間である。この三十七年間における法然の思想展開の解明は、いまだ必ずしも明確にはなっていない。例えば、『往生要集釈』や『三部長大意』の成立年時の問題、『選択集』の撰述年時の問題、『七箇条起請文』・『興福寺奏状』以後の法然の思想深化と『選択集』との関係等未解決の問題が残されている。第二期は対外論争期で、法然入滅後、嘉禄三年（一二二七）の嘉禄

の法難にいたる十五年間である。法然入滅後の念仏教団を指導した直弟子は隆寛・幸西・証空の三師である。彼等は各自それぞれの浄土教学の形成に努めるとともに、既成教団からの念仏弾圧運動に対して積極的に対外論争をおこない反論した。この十五年間に成立した著述には隆寛・幸西・証空三師の著述が圧倒的に多く、すでに門弟間に異義が続出し始めていたことが知られる。第三期は直弟子間論争期の前期で、嘉禄の法難後、幸西・証空が入寂する宝治元年（一二四七）にいたる二十年間である。嘉禄の法難のため隆寛・幸西は遠流となり、以後京都の念仏教団を指導できたのは証空ひとりであった。この二十年間に念仏弾圧事件が嘉禎元年（一二三五）と仁治元年（一二四〇）とに、二回勃発するが、嘉禄の法難のようなきびしいものではなく、逆に内部の、直弟子相互においてきびしい論争が展開された。嘉禄の法難前後から法然の有力門弟による布教活動が全国的規模で拡大し、親鸞・隆寛の遺弟は関東、浄土宗の二祖弁長は九州、幸西は四国等そ

れぞれの地方で基盤を築くにいたった。このうち、とく九州の弁長は四国の幸西（一念義）および京都の證空（西山義）の教義を異義としてきびしく批判し、鎮西義の正統性を主張した。第四期は直弟子間論争期の後期で、幸西・證空入寂後、法然最後の直弟子長西が入寂する文永三年（二六六）にいたる十九年間である。この時期の京都では引き続き證空門下の五流が全盛をきわめており、かつ関東からもどった親鸞は『教行信証』を初め著述を次々に完成させ、『西方指南抄』の書写もおこなっている。さらに諸行本願義の長西も『光明抄』を初め次々と著書を撰述している。一方良忠も千葉・鎌倉において多念義・西山義・諸行本願義等と対決しながら積極的な著作活動を展開した。今問題にしている『観経疏聞書』はこの第四期に撰述したものである。第五期は孫弟子時代で、長西入寂後、一遍が入寂する正応二年（二八九）にいたる二十三年間である。法然最後の直弟子長西の入寂により、各法然門流とも孫弟子の時代に突入し、互いに自流の教の正統性を再構築する時代に入ったのである。良忠はこの時期京都に十一年間も長期滞在し、著作三昧の生活に入り鎮西義を大成したのである。したがって、良忠の活躍期は法然門流初期教学の五期区分で言えば、第四期と第五期に相当し、先行する他の法然門流諸派の教学形成とのかかわりを全く無視することはできない。

## 二

良忠の『観経疏』註釈書として目録等に伝えるものに、福岡鈔（金沢文庫本観経疏聞書か？）、二十五帖鈔、観経疏略鈔、浅略鈔、十五卷本伝通記、極再治本伝通記等があるが、このうち現存するものは聞書、略鈔、極再治本伝通記の三書である。この三書の成立順はなお不明瞭な点があるものの、ほぼ聞書、略鈔、極再治本伝通記の順と考えられるため、一応この順序に従って、とくに金沢文庫本『観経疏聞書』文義分第一冊における三つの課題に絞って、良忠の思想展開の跡を辿ってみたい。

第一の課題は善導『観経疏』文義分序題門の「三檀等備四撰齊取」の三檀の語義に六度が含まれるかどうかの問題である。すなわち、良忠は長西の『光明抄』による三檀の典拠をふまえ、證空の『自筆鈔』による、六度の第一に三檀を含める解釈に対抗して、逆に三檀に六度を含める説を展開した。そこで、三書の釈文を対照すると、次ページの対照表のようになる。

すなわち、傍線A、C、D、Eはそれぞれ傍線a、c、<sup>①</sup>、<sup>②</sup>、<sup>③</sup>に影響を与えていることがわかる。『聞書』によれば、良忠はまず先師弁長の論の三施説を引用した上で、自説の疏の三檀説を主張し、「但私義也可依相伝」と述べ

△開書▽

問三檀四撰何等耶答真諦撰論中云云何応知諸波羅蜜差別由答有二三檀其差別施三檀一者一因施二財施三無畏施也……傳云今言三檀者指論三施也檀施梵漢異也師云法華義疏云方便檀有三種一資生檀二法檀三無畏檀此三檀撰六度上今三檀者指之歟非直云三檀所属亦広故也……然而論中六度各開三品差別三施者即是檀度三品也不撰後五度二疏中三檀者広撰六度故今三檀指三檀一歟……但私義也可依相傳也……上人御口決不可聊尔故也

△略鈔▽

先師云三檀者撰論三施也一財施二法施三無畏施也嘉祥法華義疏三且立一次間生檀檀波羅蜜也二法檀精進禪定智惠波羅蜜也三無畏檀戒忍二波羅蜜也義疏三檀私傳之

△伝通記▽

三檀者無著所造金剛般若論立三檀撰六度……天親般若論又作頌曰檀義撰於六……嘉祥法華義疏據此等論三檀撰六度也……唯識第九亦立三檀此等論未云撰六度

つつも、最終的には自説をもつて「上人御口決」と断じている。このように良忠はしばしば先師をのりこえた解釈を展開している。しかるに『略鈔』では先師の説と良忠の自説とを併記し、いずれとも決積していない。ところが、晩年の『伝通記』になると、自説と対立する先師弁長の説を削除して最初から自説のみを展開している。しかも自説の典拠として新たに無著の『金剛般若論』、天親の『般若論』を増補して完璧化に努めた。このように『略鈔』・『伝通記』と対比しながら『開書』を考察することによって、良忠の五十七歳から晩

年にいたるまでの思想展開の跡を明らかにすることが可能であるといえよう。  
第二の課題は要門弘願内因外縁説の成立過程の問題である。善導は『観経疏』玄義分序題門において娑婆の化主（釈迦）が浄土の要門を説きあかし、安樂の能人（弥陀）が弘願を顕彰された、といい、具体的に言えば、要門とは『観経』所説の定散二善であり、弘願とは『無量寿経』所説の四十八願である、と述べている。この善導の釈文には増上縁という語はあるが、外縁という表現はないし、まして定散二善を内

因とする解釈はこの釈文からは見い出せない。では良忠はどのような点に注目し、どのような過程を経て、他に例のない全く独創的な要門弘願内因外縁説を主張するに至ったのであろうか。すなわち、『聞書』によれば、良忠の要門弘願内因外縁説は定散諸行を悉く往生の行とする解釈が前提となつて成立していることが知られる。これは西山證空の諸行不生説に対抗する解釈である。要門弘願に関する『聞書』と『伝通記』との釈文を比較すると、『伝通記』では自説である要門弘願内因外縁説の典拠の経論が大幅に増広され、自説の完璧化に努めた跡が明白である。

このように多くの典拠を駆使して形成された内因外縁説に対して他の法然門流から二つの問題が提起された。第一は定散諸行がともに往生の行因であるとする、念仏は要門の中に含まれるか否かの問題である。すなわち、西山義の證空は「定散二善、上立弘願之一行」といい、念仏は散善の中に含まれない弘願の一行であると主張している。これに対して良忠は『聞書』において、

「今云此義異、要門弘願之旨、念仏為衆生、行因之邊、要門也定散、外不可立念仏行、文理決定、文者下三品、文也理者衆生、善行不口定散故也」

といい、念仏とは『観經』の下三品の経文に根拠をおき、起行としても散善の中に含まれると反論している。因みに諸行

本願義祖長西の解釈をみると、

「廻斯二行求願往生也等事

疑云称名念仏者今二行撰歎答尔也群疑論、五云念仏三昧或深或淺通定散通文」

といい、定散二行の中に念仏が撰せられるとし、微妙な違いはあるものの、良忠とはほ同じ解釈を展開している。この問題は結局定散諸行の往生を認めるか否かによって解釈が分れてくるといえよう。第二は念仏のほかに定散諸行でも往生の行因になり得るとすると、諸行往生に対応する弘願は何かという問題である。諸行往生という点では良忠と同じ立場に立つ長西は一步進めて諸行も本願に誓われた行であるという説を立てたが、良忠はそれを否定して諸行非本願説を主張した。では非本願の諸行が何故に往生の行因となり得るのであろうか。そこで、問題の弘願積について三書の当該釈文を比較してみると、良忠自身における弘願積に大きな思想展開があったことは明白である。まず『聞書』では四十八願中に一願だけあげるとすると、どの願を最も重要な別願とするのか、について十八願説と十九願説とに分けれ「一門之中諍論」であったという。良忠は第十九願は「成諸行往生強縁」である故に重要であり、第十八願は「探教元意」ぐる上で重要であるとして、両願をならべて重視している。次に『略鈔』では「一門之中諍論」という箇所が削除され、第十八願説、

あるいは第十九願説いずれかに決めることは「何レ偏」であり、「只西願通」すべきであつて、「地體此、無益論也」と断じている。さらに『伝通記』になると、第十八・十九並列説から第十八・凡夫引接の願並列説へと変化している。凡夫引接の願とは第十八、第十九、第二十、第三十五の四願である。良忠が諸行往生の強縁を第十九願に限定することなく、第二十、第三十五願にまで拡大解釈した意図は長西の諸行本願義と一線を画すことにその狙があつた。『聞書』の「先師云……」以下の文は『伝通記』では「祖師云」と訂正されている。この文の内容は明らかに良忠が長西の諸行本願義を否定したものであつて、「先師云」よりも「祖師云」の方がより強力な根拠となり得るからであらう。

△聞書

疑云若定観言名観者限十三観也何故通云十六観歟答先師於吉水云伝故上人御義云如来赴夫人請説定善之時撰機未及故開三福九品給事源赴自観門是故相從十三立後三観名也云々彼聞書題云吉水聞書

△略鈔

但三輩観観定観難屬故通散心観云義存人不審有証拠難定事歟只是十六内前三観定善相從十三三輩観名也相伝

△伝通記

問若言観名不通散者何故経文別結三輩同名想観疏亦判云上輩観行善文等中下亦尔又往往云十六観門一此等正以散善名観何云レ約初答祖師云此経者便因答請一開三散善一故相從定観後之三輩亦立観名也予相伝此義後值宿蓮房彼人伝得故上人自筆抄彼全文同今義一

「観」に関する「当世義」として、次のような六種を挙げて  
いる。

- (一) 佛観機之観……………長樂寺義隆寛の説
- (二) 廃立之観……………一念義辛西の説
- (三) 正因之観……………西山義證空の説
- (四) 観知之観……………昇蓮房の説
- (五) 見佛之観……………諸行本願義長西の説
- (六) 定善之観……………乘願房宗源の説

このような六種の異説をふまえて、良忠は自説の相從観説を主張するにいたつたのである。良忠は相從観説を展開するにあつて二種の強力な論拠を示しているので、順次検討してみよう。

第一は先師聖光から相伝した『吉水聞書』である。すなわ

△聞書▽

先師於吉水<sub>ニ</sub>伝<sub>フ</sub>故上人御義云如来赴夫人請<sub>レ</sub>説<sub>ニ</sub>定善<sub>一</sub>之時撰<sub>レ</sub>機  
未<sub>レ</sub>尽故開<sub>ニ</sub>三福九品<sub>一</sub>給事源赴<sub>レ</sub>自觀門<sub>ニ</sub>是故相從<sub>ニ</sub>十三<sub>一</sub>立<sub>ニ</sub>後<sub>ニ</sub>三觀  
名<sub>一</sub>也云々彼聞書題云吉水聞書疑云大師所判有<sub>ニ</sub>三輩觀見<sub>一</sub>相從之  
文事<sub>ニ</sub>耶答正觀<sub>一</sub>即是定門之積是也

となる。すなわち、『糅鈔』の方がやや詳細である。『聞書』では『吉水聞書』の本文ではなくて、問答の部分であつた釈文が、『糅鈔』では『吉水聞書』の本文の中に含まれている。また『糅鈔』には「自筆」とあるが、誰の自筆であるのかわ

ち『吉水聞書』を引用する釈文を対照すると、前ページの対照表のようになる。つまり、まず『聞書』では先師弁長が吉水において法然から直接伝承した教えの中にすでに相從観説があつたと記し、次に『略鈔』では実に簡単に「相伝」とだけ記している。さらに『伝通記』では『吉水聞書』のことは全く削除し、直ちに「祖師云」とし、かつ宿蓮房に直接会い、法然の自筆本を入手したところ、そこにも相從観説が記されていた、という。「故上人自筆抄」に関する記述はすでに『聞書』にも記されており、詳細は後述に譲る。それはともかくとして、『吉水聞書』と称する文献ははたして存在していたのであろうか。しかるに浄土宗七祖聖罔（一三四一—一四二〇）は『伝通記糅鈔』に『吉水聞書』を引用している。そこで、『聞書』の引用文と対照すると、

△伝通記糅鈔▽

有人云吉水聞書<sub>ニ</sub>自筆<sub>一</sub>云三輩觀是相從觀也謂<sub>レ</sub>赴<sub>レ</sub>請<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>説<sub>ニ</sub>定善<sub>一</sub>撰<sub>レ</sub>機  
不<sub>レ</sub>盡故更<sub>ニ</sub>自開<sub>ニ</sub>三福散善<sub>一</sub>其散善因<sub>ニ</sub>答<sub>一</sub>請<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>故相<sub>ニ</sub>從<sub>ニ</sub>定觀<sub>一</sub>後<sub>ニ</sub>三輩<sub>一</sub>亦  
立<sub>ニ</sub>觀名<sub>一</sub>也序分義云傾<sub>レ</sub>心請<sub>レ</sub>行佛開<sub>ニ</sub>三福之因<sub>一</sub>正觀即是定門<sub>ニ</sub>更顯<sub>ニ</sub>  
九章之益<sub>一</sub>上<sub>ニ</sub>此相從證<sub>一</sub>正字所<sub>レ</sub>顯對<sub>ニ</sub>傍觀<sub>一</sub>故<sub>ニ</sub>已上<sub>一</sub>

明であるし、何を根拠としているのかも明らかではない。しかも、『糅鈔』の引用文では「三輩觀是相從觀也」とか、「此相從証」といい、『聞書』よりも表現が直接的である。もし、良忠が『吉水聞書』の原文を見ていたとすれば、なぜよ

り直接的な表現を引用しなかつたのであろうか。さらには『吉水聞書』という文献の伝承上の問題点とともに、より根本的には相従観説という思想が法然にあり得るか否かの問題である。相従観説はやはり法然滅後、法然門流の分裂以降の

△聞書▽

此義傳受之後値<sub>レ</sub>宿蓮房<sub>二</sub>彼人云々<sub>一</sub>三輩観云不同也而慥<sub>レ</sub>故上人書給抄物中有<sub>レ</sub>義非<sub>二</sub>当世義<sub>一</sub>云云同云<sub>二</sub>其義<sub>一</sub>彼答云<sub>二</sub>先承<sub>二</sub>御義<sub>一</sub>予云<sub>二</sub>此義之處<sub>一</sub>同御抄物云<sub>二</sub>當世義<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>六一云<sub>二</sub>仏観機之観<sub>一</sub>二云<sub>二</sub>廃立之観<sub>一</sub>念三云<sub>二</sub>正因之観<sub>一</sub>西山四云<sub>二</sub>観知之観<sub>一</sub>舟蓮房五云<sub>二</sub>見仏之観<sub>一</sub>覺明房六云<sub>二</sub>定善之観<sub>一</sub>竹谷此外有人云<sub>二</sub>草提之観<sub>一</sub>云々

となる。『聞書』の宿蓮房の記事は、それに対応する『伝通記』の釈文には削除され、前述したように『吉水聞書』を削

△聞書▽

此義傳受之後値<sub>レ</sub>宿蓮房<sub>二</sub>彼人云々<sub>一</sub>三輩観云不同也而慥<sub>レ</sub>故上人書給抄物中有<sub>レ</sub>義非<sub>二</sub>當世義<sub>一</sub>云云

となる。『聞書』では「故上人書給抄物」といい、『伝通記』

金沢文庫本『観経疏聞書』について（廣川）

思想ではなからうか。

第二は宿蓮房から伝得したという「故上人自筆抄」の問題である。そこで、『聞書』の釈文とそれに対応する『伝通記』の釈文（『略鈔』には当該釈文を欠く）とを対照すると、

△伝通記▽

又示<sub>レ</sub>異義<sub>一</sub>者或云<sub>二</sub>此経<sub>一</sub>本意<sub>二</sub>廃<sub>一</sub>定散<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>廢名<sub>レ</sub>観<sub>レ</sub>或云<sub>二</sub>十三約<sub>一</sub>機行<sub>二</sub>三輩約<sub>一</sub>佛観機<sub>一</sub>疏<sub>二</sub>云<sub>二</sub>佛更<sub>レ</sub>観<sub>レ</sub>機自開<sub>一</sub>三福之行<sub>レ</sub>或云<sub>二</sub>正行<sub>一</sub>観局<sub>二</sub>十三正因<sub>一</sub>観通<sub>二</sub>十六<sub>一</sub>或云<sub>二</sub>和尚亦<sub>レ</sub>許<sub>二</sub>十六定善<sub>一</sub>或云<sub>二</sub>去行<sub>一</sub>観局<sub>二</sub>十三所求<sub>一</sub>観通<sub>二</sub>十六<sub>一</sub>或云<sub>二</sub>散善<sub>一</sub>行人<sub>レ</sub>臨終<sub>レ</sub>定見<sub>レ</sub>佛往生<sub>レ</sub>故約<sub>二</sub>終名<sub>一</sub>観或云<sub>二</sub>草提<sub>一</sub>観也<sub>レ</sub>今云<sub>二</sub>此等<sub>一</sub>人情<sub>レ</sub>各述<sub>二</sub>一義<sub>一</sub>不能<sub>レ</sub>是非<sub>一</sub>但此義中<sub>二</sub>正因之観<sub>一</sub>既無<sub>レ</sub>其證<sub>一</sub>又若<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>廢者<sub>レ</sub>何以<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>観名<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>劣<sub>レ</sub>散名<sub>一</sub>而云<sub>二</sub>為<sub>レ</sub>廢<sub>一</sub>且<sub>二</sub>三輩<sub>一</sub>耶又<sub>二</sub>十六<sub>一</sub>観観體可<sub>レ</sub>同然<sub>レ</sub>約<sub>レ</sub>機約<sub>レ</sub>佛義門<sub>レ</sub>甚不<sub>レ</sub>穩<sub>一</sub>又所求立<sub>レ</sub>観未<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>其意<sub>一</sub>況於<sub>二</sub>一経<sub>一</sub>観<sub>レ</sub>何有<sub>二</sub>兩途<sub>一</sub>又臨終<sub>レ</sub>定有<sub>二</sub>何證<sub>一</sub>據<sub>二</sub>又大師<sub>一</sub>若存<sub>二</sub>十六定善<sub>一</sub>之義<sub>一</sub>者<sub>レ</sub>靈芝<sub>レ</sub>那破<sub>レ</sub>靈芝<sub>レ</sub>若迷<sub>レ</sub>今家<sub>レ</sub>釈義<sub>レ</sub>猥<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>破文<sub>一</sub>末学<sub>レ</sub>弥迷<sub>レ</sub>又夫人<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>不知<sub>レ</sub>如来<sub>レ</sub>自開<sub>レ</sub>之意<sub>一</sub>而以<sub>二</sub>三輩<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>観境<sub>一</sub>耶設<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>観境<sub>一</sub>佛違<sub>レ</sub>自説<sub>一</sub>何立<sub>レ</sub>観名<sub>一</sub>

除した箇所にて代りに相従観説の論拠として捜入されている。そこで、『伝通記』における宿蓮房の記事と対照してみると、

△伝通記▽

予相<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>此義<sub>一</sub>後値<sub>レ</sub>宿蓮房<sub>二</sub>彼人傳<sub>一</sub>得<sub>レ</sub>故上人<sub>レ</sub>自筆抄<sub>レ</sub>彼<sub>レ</sub>文全<sub>一</sub>同<sub>二</sub>今<sub>一</sub>義<sub>一</sub>

では「故上人自筆抄」と表現がえられている。『聞書』の

「此義」、「伝通記」の「此義」・「今義」はすべて良忠自説の相従観説を指す。従来、良忠が宿蓮房に会ったのは『伝通記』撰述以前と漠然と考えられていたが、『聞書』により良忠五十七歳以前にまで遡って考えなければならなくなった。しからば、良忠はいつ、どこで宿蓮房に会うことができたのであるか。『聞書』では良忠に出会った宿蓮房は「人々三輩、観云不同也而慥故人書給抄物中有義非當世義」と言ったという。つまり、宿蓮房は法然門流諸派における三輩観に関する異説を悉く知っていて、その問題を明らかに把握した上で、良忠自説の相従観説こそ法然自筆の撰述書の説と全同であると証明しているのである。

ところが、それに続く『聞書』の釈文に「御抄物云」といい、当世の異義六義を列挙した後に「云々」で終っている。写本がきわめて判読しがたく、あるいは誤読をしているかもしれないが、もし「御抄物」が法然の御抄物を意味するとすれば、法然自筆の撰述書（御抄物）の中に法然滅後の思想が記されているという矛盾に落ちてしまうことになる。したがって、良忠が宿蓮房から伝得したという「故上人自筆抄」は慎重に取り扱う必要がある。

それはともかくとして、良忠が『聞書』で列挙した当世の異義六義は（実際は七義、傍線A～G）は、晩年の『伝通記』になると、異義七義に増加している。つまり『伝通記』

の異義七義は当世の異義六義から乗願房宗源の説を削除した五義に新たに隆寛の弟子敬日房の説・西山の異説の二義を加えたものである。その注目すべき点は、五十七歳頃の良忠は乗願房宗源の説を当世の異義の一つとみていたのに対して、晩年の良忠は異義ではなく、自説を補助する説として評価し直していることが知られるであろう。

以上、三項目を中心として、『聞書』・『略鈔』・『伝通記』の三書を比較検討してきたが、これによって善導「観経疏」に対する良忠の独創的な解釈が、他の法然門流各派の解釈とからみあいながらも、成立し確定するに至った過程が少しでも明らかにになったのではなからうか。

### 三

小論の特色とするところは、金沢文庫保管『観経疏聞書』を解説し、『略鈔』をも含めて『伝通記』にいたる、良忠の思想史的な展開の跡を少しでも明らかにしようとする点にある。今回は玄義分第一冊に限定しての成果であるので、今後とも同様な作業を継続したい。そして一日も早く法然門流初期教学展開史全体の流れの中に『伝通記』の位置づけをしてみたい。

△キーワード▽ 金沢文庫本『観経疏聞書』、然阿良忠、法然門流

（大正大学専任講師）